

---

# スプラッターF コンビニ店員の話

かぼちゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スプラッター コンビニ店員の話

### 【Nコード】

N8727Z

### 【作者名】

かばちゃ

### 【あらすじ】

誰も知らない最強の称号スプラッター。  
しかし、平和は残酷にも彼を受け入れない。  
コンビニの店員として働くも、そのコンビニの店長のせいで事件に巻き込まれていく。

## プログラマーの仕事ってやつ(前書き)

## プロローグとヒーローの仕事ってやつ

### プロローグ

第三次世界大戦ってのはもう起っているのんだ。

歴史の教科書には乗らないし、もし、今度戦争が起こればそれが第三次世界大戦になるだろう。

しかし、確かに戦争は起こった。

みんなは、知らなくて当たり前だ。

なぜなら、お前ら人間同士は戦っていないんだから。

### 第一章

#### ヒーローの仕事

俺は第三次世界大戦では、絶対に極悪非道に世界を救うヒーローだったと思う。

戦いしか知らなかった。気が付いたら戦っていた。そんな言葉じゃ生ぬるい。

俺は戦いの中で生まれ、戦いの中で死ぬ。はずだった。

今では、誰も知らないようなマイナーなコンビニの、店員だ。

俺は、戦いが終わった後、何も持つてはいなかった。

そもそも、生きていることさえ不確かだった。

本当に何も、戸籍すら用意されていなかったのだ。

すべては俺の妄想かもしれない。

そうもとから俺はしがたい平凡な人間で、俺の誇りも苦悩も過去もすべては夢想かもしれない。

俺の称号はスプラッター。戦車をカッターナイフで切り刻む様な生きる伝説。

まあ平和は伝説なんて求めてない、つまり俺は必要ない存在だつてこと。

それでもいいんだ、俺も平和は嫌いじゃない。

平和は嫌いじゃないが、コンビニの仕事は難しい。

弁当はいつも潰してしまうし、レジで愛想よくすることはもっと難しい。

この仕事に就こうと思った。というか、就くきっかけは簡単だ。店長に頼まれた。それだけ。

他に特別な感情などない。

論理的に考えてありえない。

その言葉はまさに光のようだった。

生きがいもなく、親もない俺には、世界と自分を繋ぐたった一つのものだった。

だが平和つてのはことごとく俺をないがしろにする。

店長にはもちろんだが、

後輩で、しかもバイトの沙紀ちゃんにすら頭は上がらない。

「おい、会計まだかよ、おっせーなー」

人がボーっとしている時に話しかけるような、空気を読めない奴は、

コンビニに来る資格はないと日々思っているのだが、このことを話したら店長に叱られた。

物覚えが悪い俺でも、こいつのことぐらいは覚えてる。

この店の数少ない常連で、町生粋の不良だ。

まさにエリート、猫さえ道を開けるほどの。

こんなやつ一昔前ならぼっこぼこだが、今の俺はスプラッターではないコンビニ店員だ。

対応としては、

「すいません、ただいま」

これが正解なのだ。

本当に嘆かれるべき時代になった。

それとも、俺が嘆かれるべき存在なのか。

決して叩き潰してはならない。こんなやつでもこの店の常連なのだ、

失礼は許されない。

ささっとレジに缶コーヒー通す。

「あ、すいませーん。コーヒーホットにしてください。レンジで、なんでアイスのコーヒーをレンジまで持ってきたのだろうか。」

こいつはバカか。

そもそも、レンジで缶コーヒーを温めたら俺はくびだろう。

なにより、店長に怒られてしまう。

「はい、ホットですね。」

ホットのコーナーからコーヒーを持って来て、替えてやる。

「ありがとうございます。」

取り替えたコーヒーを渡して笑顔をサービスだ。

不良がひきつった笑みを向けてくるが気のせいだろう。

そっぴいえば、俺が笑うとみんなこんな顔をする。

何かおかしなところがあるのだろうか。

「またお越しく下さいー。」

む、探偵が青ざめた顔をしてはいってきた。

探偵とはこいつの職業であり名前である。本名は大喜多 探偵、

しかし俺は名前以外は、こいつは探偵の職業には向いていないと思っっている。

事件を依頼さればうちの店長に依頼してくる、へたれ野郎だ。

「やあ、て、店長どこかな」

別に今のは、俺が笑顔の練習をしていたからどもったわけじゃない。

いつも俺に対しては、この調子なのだ。

もう長い付き合いなのに、本当に失礼な奴だ。

店長なら休憩室で売り物のロールケーキを頬張っていることだろう。

しかし探偵にいつも頼られてはいるが、われらが店長が名探偵という事実はない。

確かに人より運はいいだろう、しかしそれだけだ。

彼女が動けば勝手に事件のほうから解決に向かって動き始めると探偵は勘違いしている。

「探偵か、どんな事件だ店長に任せなさい。」

冷静を装いながらも内心ワクワクしているのだろう。

少し早口になっている。

今、小走りで休憩室から出てきた彼女こそが、

推定24歳、本名不明の店長だ。

ケーキのクリームが口についているがいつものことなのであえて指摘はしない。

今は髪の毛をポニーテイルにしている。

いつもは、肩まである髪を縛ったりはしないので、ケーキを食べるために縛ったに違いない。

なかなか見れないが、横で縛っているのが最も似合っていると俺は思う。

探偵から事件の内容を聞かされる。

それはいちばん店長の気を引きそうな、絶対来てはいけないような類の事件だった。

この24時間営業のはずのコンビニは不定期に休業する。

closeの看板が用意されているコンビニは、この広い東京を捜してもここだけだろう。

俺は、電話でバイトの沙紀ちゃんを呼びつける。

「もしもしー、えっ、今日は非番ですけどー。あ、もしかしてあれですか」

そうあれだ。休日出勤だが来てもらわないと店長がすねる。

事件の概要はこうだ。

明日の夜12時ちょうど、国会議事堂を破壊するという怪文書が、探偵の探偵事務所に送られてきたらしい。

なるほど明らかに悪戯である。だが店長は信じるだろうそれが店長だ。

「なぬ、それは大変だ、私の出番というわけだな。

この美少女名探偵がズバツと解決してやる。」

なぜそんなに自信満々なのか。

確かに猫さがしや下着泥棒しか最近事件はなかった。

平和つてのは、人に事件や波瀾を求めさせる。

それがどんな人間であつても。

まあ、店長がワクワクするのも解らなくはない。

それは悪戯なんじゃないかと俺が探偵にこつそり問いかけると、あながちそうも言いきれないらしい。どうやら探偵も初めは疑っていたらしいが

それはそうだろう、こんなものが本物だとは考えにくい。

だがその怪文書には、我々の本気を知らせるため八チ公を爆破すると書いてあったらしく、

そして八チ公は爆破された。

だが今から警察にこれを見せても信じてはもらえない、

警察は八チ公の爆発を見てから作ったと思うだろうからだ。それで困り果てここに来たらしい。

正直、店長の手には負えないだろう。しかしこれはどうすべきか、

なにせ、いまだに悪戯とも考えられる。

それに悪戯でないにしろ、八チ公を爆破したからって国会議事堂を爆破するとは限らないのだ。

しかしもう店長はやる気を出してしまっただろう。こうなったらおれたちは巻き込まれるしかないのだ。

正確には俺は、だが。

まず俺たちは店長の命令で聞き込みに出た。

店長いわく、何事もまず聞き込みから始まるらしい。

刑事は足だといっていた。店長は刑事ドラマが好きなのだ。なら行くしかないだろう。

俺は刑事になりきってやる。

俺は爆破されたばかりの八チ公像の前に来ていた。

八チ公も主人の帰りを待っていたら、爆破されるなど思いもよらなかっただろうに。

可愛そうなやつだと同情した。

まだ警察もちらはら見られるが大体の聞き込みなども終わっているらしく、数は少ない。

警官の数は見えているだけで3人、多く見ても6人程度か、この程度の数なら一瞬で沈められる自信がある。

まあ、だからなんだという話だ。

俺は近くにあったタバコ屋のおばちゃんに話を聞くことにした。聞くことなどないが、形だけでもやっておかないと店長に怒られるからだ。

「おばちゃん、ハチ公が爆破されたとき人はいたか教えてくれ。」

これは意外と様になっていく質問じゃないか。

おばちゃんは無言でたばこを指さす。

どうやら煙草を買わないとしゃべってくれないらしい。

たばこは吸わないのだが、店長が好きな刑事ドラマの主人公は、いつも煙草をくわえていたな。

たばこを三ダースほど適当に買くと、満足そうにうなずいた後に話し始めた。

「ありがとよ、おばちゃんに何でも聞きな。いくらでも話してやるさ。」

俺は同じことをおばちゃんに聞いた。

「変なこときくね、たしかおっさん一人とホームレスの人がいたはずだよ。」

あと高校生くらいの餓鬼もいたね。」

そうか、と答えて俺はコンビニに帰ることにした。

おばちゃんももういいのかいと言っているが、いいのだ。

俺は別に犯人に興味はない。

情報を持って帰るという形さえあれば、店長に怒られずに済む、それに警察が捕まえられる犯人を、俺たちがどうやって捕まえるというのだろうか。

国会議事堂のほうや、探偵事務所のほうに行っていた奴らも返ってきた。

といっても、店長はテレビを見ていただろうし、探偵は使い物にならないだろう。

自分で、何か成果をあげられるなら、ここには来ないからだ。

あとは沙紀ちゃんだ。根が真面目な沙紀ちゃんは常に一番の働きをしてくる。

店長に今日のことをそれぞれ報告する。

沙紀ちゃんはやはり真面目に聞き込みをしたらしく、爆弾が仕掛けられたという国会議事堂に行ったらしい。

もちろん怪しい人物は国会議事堂に出入りしていないし、当然だが、そんなものは持ち込めないようになっていと言われたといっている。

探偵も怪文書を送りつけた奴を割り出そうとしたらしいが、外国から送られてきているということしか、解らなかったらしい。そんなのはどうにでもごまかせるのではないだろうか。

やはりへたれはへたれでしかない。

何か考え込んでいるような店長だったが、閃いた！ と叫んで机の上に立つ。

ふわっとスカートが揺らめく。

まるで、新しいおもちゃをもらった子供のような顔をしている。

まあ、子供におもちゃを買ってやったことなどないが。

「謎は解けた。犯人は予告状を送りつけようと思ったが、怖くなり、当初の予定の政府ではなく探偵のところに送りつけたのだよ。」

つまりこれはもはや国の危機だ。我々は断固立ち向かわなくてはならない！！」

どの謎が解けたのかわからないが、店長が満足ならそれでいい。

俺はcloseの看板を閉まってこようと、席を立った。

「というわけで。」

嫌な予感がする。

「国会議事堂に行くぞー。」

そんな馬鹿な

謎は解けたんだろ？

なぜそんなことをするのだ。

俺には理解できない、彼女がよく使う正義ってやつを。

## ヒーローの仕事後半

沙紀ちゃんは学生なので遅くなつてはならないといって帰した。探偵もなぜか帰った。

しかたなく俺たちだけでは国会議事堂に侵入していた。何故侵入できたのかって？

別に何かしたわけじゃない、誰もいなかったのだ。

なので簡単に入ることが出来た。

これは、かなり異常事態ではないだろうか。

別に警備員さんの職務怠慢を嘆いているわけじゃない。

さつきから何もしくとも漂う緊張感、これは別に暗闇に包まれているせいだけではないだろう。

感じるのだ。同族の匂いを、

それは狂気であり生の香りそして死の色をはらむような何か。

本能が店長をこれに巻き込んではいないと告げる。

「おい、そろそろ帰らないか？」

「む、何を言うか。事件の匂いを感じないか？ これからだろう。国会議事堂に人がいないことなどありえない。」

そこまで店長が言ったところで異変が起きた。

突然、白い煙が周りを包み込んだ。

これはなんだ？

習慣というものはなかなか抜けられないもので、俺はとっさに息を止める。

そして、倒れこむ店長を受け止める。

危なかった。安らかな寝息が聞こえてきて一気に緊張がとかれる。そして暗闇から現れる一つの影。

「よう、同類。」

それは、あの不良だった。

## 忘れられた正義の言葉

### 2章 忘れられた正義の言葉

「悔しいとは思わないか、俺たちはいつも戦争をしてきた。

この平和は俺たちが作ったんだ。けどよ、全然これっぽちも、誰も俺たちに感謝すらしねえのは！」

奴の言うことは解る。

彼が俺の同類で、同じように国のため戦ったとしたら、その考え方にたどり着くのは至極当然だ。

「お前だってそうだろう、コンビニの店員やってたって臭いでわかるヒーローだったはずだ。何の不満もないはずがねえ」

確かにそうだ。不満はある。

「だから、俺たちの存在すら認めねえようなこの国の平和を、ぶっ壊して、俺たちの時代を築くんだ。」

それで気が済むならやればいいと思う。

俺にはそれを止める理由などないのだから。

「お前だってそうだろう、こんな世の中ぶっ壊してえと思ってるはずだ。」

何より俺たちの血がそれを求めている。」

そうだな。俺の血はそれを求めている。

「それともなんだよ、俺の邪魔をするってのか、

こんな恩を恩ともとらられないような奴のために、平和を守ってか。」

平和を守るなんて偉そうなことを言う権利も理由もない。しかしこれ以上こいつの話を聞く必要もないだろう。

睡眠ガスかなんかだろうが、店長に危害を加えるようなまねをした奴と仲良くはできない。

「そんなはずねえよな。この国は俺たちに、恨まれることなら、数えきれないほど俺たちにしてきたが、恩があるはずの俺たちに、何も返してはくれなかった。まるで、俺たちは捨てられたようだった。」

そう、俺たちは国に人間として登録されてすらいらない。就職や、学校に通うことは不可能だ。

戸籍を確認しないというなら話は別だが。

「そうだ、手伝えよ。おれはこれからここを爆破する。だが、一度は守った人間をむざむざ殺すのは寝起きが悪い。」

まあこいつも根は悪くない奴なんだろう。

俺たちの同族に悪い奴なんているはずがない。

この国のために一度は命を懸けた奴らなんだから。

「だから人払いしてくれよ、たいていの奴らはどけたが、まだいないとも限らないからな。」

この不良の名前も知らないのが気になった。

そもそも名前をちゃんと持っているのかが気になった。

「お前名前はなんて言うんだ？」

「それは、コードネームか？ それとも、俺が名前をもらってるだけでも？」

そうか。それはとても悲しいことだ。

俺は名も無いまま失った同胞を思い出した。

奴の墓には名前はない。

「けん玉マスター。」

「ん？」

「だから、けん玉マスターって呼ばれてるよ。これだって名前だろ。餓鬼どもからしか呼ばれてないがな。」

幾分か恥ずかしそうだ。

「お前はどんなんだよ。俺だけ言うのは不公平だろ。」  
俺の名前か…。

確かにこいつにだけ話させるのは不公平だ。

「さあな、欲しい名前はあるんだが、手に入れるのは難しい。」

「はっ、俺たちにできないことはないと言われてたのにな。」

自嘲気味にけん玉マスターが笑う。

「邪魔はしない、俺は帰る。店長を送らなきゃならないしな。」

不良は去っていく俺に、何も言わなかった。

それが邪魔をしないだけで、良しとしたのかは分からない。

俺は国会議事堂前でタクシーを拾った。

奴は本気だろう、俺の同類ってことは素手でも国会議事堂ぐらい爆破できる。

これでよかったのだ。俺の血は確かに混沌を望んでいるし、あいつを止める権利なんて俺にはない。

優先すべきは店長だ。

なぜなら、無関係な奴は巻き込めない。

俺は店長をコンビ二に運んだ。

店長を休憩室のソファに寝かせ、毛布を掛けてやる。

店長の寝顔は安らかで、どこまでも平和ってやつだった。

そう、優先すべきは店長だ。

## 俺がほしいもの

### 三章 俺が欲しいもの

俺はタクシーに乗って東京タワーの前まで来ていた。

タクシー代だけでかなりの出費だ。

次の給料日まで持つだろうか、

店長のコンビニから拝借してきたカッターナイフをポケットの中でカチカチと鳴らす。

今日だけでかなりのサービス残業なんだから、このくらい許されるだろう。

はたして、本気を出すのはいつ以来だろうか。

呼吸するたびにすべての細胞が深い眠りから覚めていくようだ。

力がたぎる。なんて爽快な気分なんだろうか。

きっと奴が求めていたのはこんな気分だろう。

最高だ。

あの時は毎日こんな気分だった。

だが俺は何をしてるんだろうか。

何もかもが自分にいい方向に動こうとしている時に、協力するならまだ分かる。

しかし俺はいったい何をしてるんだろうか。

考えるのは苦手じゃないが好きじゃない。

まずは行動をしてから考える。本能のままに。昔のように。

東京タワーの中に人がいるか確認し中にいた人全員を気絶させ外に放置する。

次にカッターナイフで鉄柱を切り、東京タワーを地面から切り離す。

地面から解放された東京タワーを、右手でよつと持ち上げる。

中々に重い。なまっているのかもしれない。

気配を消し手ごろなビルによじ登り、国会議事堂を遠くに見る。

ここからが本番だ。

スプラッターの名は伊達じゃない。

矢は一発、必ず決める。

標的は国会議事堂にいるあいっだ。そうあいつも同類ならこのぐらしいないと仕留めきれないだろう。

深呼吸する。刺すような緊張、なんて懐かしい。

俺は国会議事堂に向けて東京タワーを思いっきり投げた。

もう、コンビニはやめようと決めていた。

さすがに、やりすぎたからだ。

荷物などないが、店長と夏祭りの時撮った写真は持っていく。

どうせ客など日に2、3人だ。

俺がいなくとも、何も困らないだろう。

今度はコンビニまで歩いて帰ってきた。

タクシーに乗る金がなかったからだ。

コンビニのロッカーから、写真を取り出すと俺の持ち物が他にないことに気付く。

何かが飛んできてとっさにそれを受け止める。

缶ビールだ。それもこのコンビニで一番高いメーカーだ。

「一緒に飲むぞ。金はレジに入れとくように。」

店長だった。

店長は酒にものすごく弱い。

一口飲んでもう顔が赤くなっていた。

しかし、俺たちは黙々と飲み続けた。

ふと、店長は思い出したように、給料上げてやろつかと言いだした。俺は、必要ないといったが、何か不満があるらしく不機嫌だ。

「なら、何が不満なんだ！」

やけくそ気味に言い放つ。

なにが気に入らないのかわからないが、酔っ払いとはそういうものだ。

「お前いなくなるだろ。」

なぜかは分らないが、店長は俺がいなくなると思っているらしい。

勘がいいと誉めてやりたいが、しかし酔っぱらうと店長はいつもこれを言う。

「お前がいなくなったら、この店はどうなるんだ。」

お前が弁当を握りつぶして、弁償してくれるから成り立っているのに。」

「6割だぞ6割、ひぐっ、どうしたらいいんだ。」

一緒に、億万長者になってくれるって言っていたのに。」

6割も俺の金だったのか、道理でバイトを掛け持ちしても金がたまらないはずだ。

いつもならどこにも行かないと安心させてやるところだが、今回は嘘をつくことになってしまう。

それをしたら、店長を裏切ることになるのではないか。

そんなことを考えていると店長は眠りだした。

どうやら酔いつぶれたようだ。

「俺にどうしろっていうんだ。」

もうなんか馬鹿らしくなっていた。

もうどうでもいいのか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8727z/>

---

スプラッターF コンビニ店員の話

2011年12月28日20時48分発行